

講座 哲学

4 価値の哲学

講座 哲学

編集／

山本 信・大森莊蔵・城塚 登・小倉志祥

4

価値の哲学

小倉志祥 編

東京大学出版会

執筆者一覧(執筆順)

小倉志祥	東京大学文学部教授
浜井修	東京大学文学部助教授
林田新二	電気通信大学
弘睦夫	広島大学文学部助教授
亀井裕	東北大学文学部教授
佐藤正英	東京大学文学部助教授
湯浅泰雄	大阪大学文学部教授
小原信	青山学院大学教授
上妻精	成蹊大学文学部教授
相良亨	東京大学文学部教授

講座哲学 4巻 価値の哲学

1973年5月15日 初版
1980年6月30日 4刷

検印
廃止

編者 小倉志祥

発行者 江村稔

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話(811)8814 振替東京6-59964

三陽社印刷・牧製本

3310-14655-5149

まえがき

この巻の目標と構成について一言しておこう。

物はただ有るだけではなく、よいものとして、またよくないものとして有る。人はただ知るだけではなく、よいものを知って喜び、よくないものを知って悲しむ。喜び悲しむ人自身がまたよくもあしくも有りうる。そして、よし・あしそのことは多種多様である。よいものには価値があり、よくないものには価値がない。価値とはよいものの「よさ」の総称である。価値は人の存在と行動に絶えずつきまといっている。

価値に関する思索は洋の東西を問わず古くからある。それにも拘らず、事新しく「価値の哲学」を重視したところに、一九世紀後半以降の現代哲学の一つの特徴がある。これは現代社会における価値観の混乱という事態に相応じたことであると言ってよい。価値は文化の指標であるが、しかし機械文明の普及につれて高次の文化価値は色あせ、高貴なものは稀れになってゆく。経済の高度成長は価値とは貨幣価値のみのことであるかのような錯覚をさえ生じさせる。しかし人間がホモ・エコノミックスに成り切ることも不可能である。誰しも時には、金には代えられぬよいものの有ることを感ずるに違いない。この巻はかかる事態に対して「価値」なるものの基本的構造を考察することを目標としている。

ニーチェにおける「神の死」とウェーバーにおける「神々の争い」は、価値について考える場合に避けることのできぬ試金石である。Iはこの巻のいわば序説であり、ニーチェとウェーバーの価値論を起点とし、現代における価値

哲学の代表的学説を導きとして、「価値」の概念に内在する問題点を指摘することを目ざしている。Ⅱは社会哲学の立場からなされた現代文化論であり、その考察はウェーバーにおける「合理性」の意味をめぐってなされている。Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは各論の部である。善なるものを志向する「倫理」と、美なるものを志向する「芸術」と、聖なるものを志向する「宗教」と、真なるものを志向する「学問」を論題として取り上げた。各項目に立場あるいは方面を異にする二つの論文を収めたのは、この講座の他の巻の主旨と同様に、そうすることによって対照的に、主題となっている価値領域の意義を明らかにしようと思図したからである。最後のⅦの二つの学問論は討論の材料となることを当初から予定して書いてもらった。その二つの討論も専攻分野を異にする人たちによって行われているが、参加者をこの巻の執筆者のみに求めたのは、討論を通して各人の持ち味が読者にいくらかわかるはずであり、それがその人の執筆している論文をよりよく理解する一助になるのではないかとも思われたからである。

編 者

まえがき

I	価値の哲学——序説	小倉志祥	一
---	-----------	------	---

II	現代文化と「合理性」の意味	浜井修	三
----	---------------	-----	---

——ウエーバー解釈の再検討——

III 倫理

一	実存の倫理	林田新二	九五
---	-------	------	----

二	メタ倫理学	弘睦夫	一三三
---	-------	-----	-----

IV 芸術

一	芸術と技術	亀井裕	一五五
---	-------	-----	-----

二	近代日本における美の様態	佐藤正英	一七三
---	--------------	------	-----

——谷崎潤一郎の場合——

V 宗 教

- 一 聖なるものと人間の生……………湯 浅 泰 雄 一九九
- 二 〈信仰〉について……………小 原 信 二七

VI 学 問

- 一 学問の理念……………上 妻 精 二五七
- 《討論》 上 妻 精・浜井修・佐藤正英・小倉志祥 二七一
- 二 思想史研究の意義……………相 良 亨 二四五
- 《討論》 相 良 亨・湯浅泰雄・浜井修・小倉志祥 二四四

I
価値の哲学―序説―

小
倉
志
祥

一 価値哲学の課題

価値という言葉は新聞や雑誌や放送で頻繁に使用され、既に日常用語となっている。この言葉を使った熟語も多い。貨幣価値、文化価値、価値判断、価値基準、価値理念、価値観、没価値性、等々、枚挙にいとまがない。これらの熟語は価値なるものが人間生活の一つの基本的構成要素であることを示していると言ってよいであろう。価値のあるものはよいもの、ドイツ語でいえば *Gut* (財) である。だから価値とはよいものをしてまさによいものたらしめている「よさ」のことである。例えば文化価値は文化財の本質ということになる。その「よさ」の種類と構造を究明することが価値哲学の一つの課題である。

戦前と戦後ではすっかり価値観が変わってしまった、世代の断絶は価値観の相違である。これもよく耳にすることであり、現代における教育と社会生活に関する根本問題の的を射た合言葉と思われるくらいである。そこには、何がよいかがよくないかは、従って価値なるものは時の流れにつれて変化するという観念がある。これはいわゆる歴史主義であり、価値論としては価値相対主義である。これに対しては、何が価値あるものであり、何がそうでないかは人により時によって異なるにしても、価値そのものは必ずしもそうではなく、価値のうちには変化しないものもあるという考えが成り立つ。価値に関して可変性と不変性を考察することもまた価値哲学の課題である。

価値の語意

価値とはよいもののよさと言うとき、この「よさ」は日本語として多義的である。そのことは「よ

し」と訓読しうる漢字が実に多いことから明らかである。可、由、吉、好、旨、利、良、佳、宜、芳、美、淑、善、義、嘉、鮮、これはいずれもよしであり、このほかにもまだある。われわれの生活はよいものとよくないものに取り巻かれているが、その「よさ」の質は多種多様であり、まことに豊富である。よい物とよい事とよい人ではその「よさ」すなわち価値の質は違う。それを漢字によって区別して書きうることは必要である。しかしその区別は文字づらのみのことではなく、事柄自体の本質にまで及ぶことである。文字によって区別しても、文字相互の意味内容の区別が判然としていたとは限らないのである。例えば「正直は最良の政策である」と言うとき、最良を最善と言い換えても少しもおかしくないはずである。しかしわれわれが善^{ぜん}という表現になにか独特の意味があり、「良い手段」の代りに「善い手段」と書きかえてはならないと感ずるならば、あるいは善悪という対に吉凶や福禍や美醜などの対とは異なった独特の意味を感ずるならば、その意味内容の考察は文字のみに関することではなく、価値の哲学にまで行かざるをえないのである。

価値とは「よさ」のことである。ここで価値が字源的にどのような「よさ」であるかを『角川当用漢字字源辞典』によって検討しておく。價は意味を表わす「人」と音を表わす「賈^か」とからなる形声字であり、カの音に変わった「賈」の意味は「多くの利銭を得る」、そこから「売賈のしごとの意」をもち、価の字義は「売賈をする人、商人」である。値も意味を表わす「人」と音を表わす「直^{ちく}」とからなる形声字であり、「直」の意味は「相当する」であり、値の字義は「人が相当たる」すなわち「人が二人相對して、その身分・力倆などが對等の意」である。そこで「価値」について次のような説明がなされている。「〈価値〉という使いかたは借用であり、正しくは〈賈直〉と書くべきである。その意味は〈交易における物と金額との相当たる〉意である。これを〈直^{ちく}〉という」(四〇ページ)。

これによれば価値という漢字は本来経済的用語である。経済的価値は貨幣価値に帰着する。現代社会には、人のよ

し・あしをすぐ収入の多少によって計りたがる傾向のあることが端的に示しているように、すべての種類の「よさ」を経済的価値に還元する風潮がある。これは価値という漢字を本来の意味で普及させるのには役立つであろうが、しかし人間をホモ・エコノミックスに化す方向であり、これによって価値哲学というときの価値の本当の意味は見失われ、価値論とは経済的価値論のみのことであるということになってしまふ。

確かに価値も「あたい」である。数値とか等価という用法があり、そのような量的な意味で原子価とか栄養価とか燃焼価とかあるいは交換価値とかいう用法も生ずる。「あたい」がそのような量的な意味であれば、「あたいする」こともまた同様である。そうであれば「……値する」ことは経済的意味で「……の値打ちがある」というのと同じであることになってしまふ。しかし例えば、聴くに値する、記憶に値する、驚嘆に値する、畏敬に値する、と言うことをすべてそれと同一視しうるであろうか。われわれはするように言うとき、その「値」が経済的でないのみならず、なにか主観化しえないものであるように感じているはずである。画商は名画に巨額の値段をつける。いかなる名画であっても市場価値がなければ画商は見向きもしないであろう。しかしその画の美的価値は値段によってはきまらない。あるいは湖の美しさは発電に利用される水量の大小によっては計られないのである。価値哲学は一九世紀後半から哲学史の一つの流れとなるが、特にロツツェに始まってヴィンデルバントに継承される価値哲学はいわゆる真・善・美に代表される文化価値の超経験的な「妥当性」を基礎づけることをめざしている。その基礎づけの是非は別として、われわれも文化価値と称されるものに貨幣価値を越えた独自の意味を認めざるをえない。その点で金子武蔵教授が価値哲学における価値の本来の意味は「尊さ」であることを力説されていることは注目されてよい。

ヴィンデルバントは価値論をギリシア語を使って *axiologie* と言うが、これは彼のみのことではなく、また同じくギリシア語で *timologie* と称する人もいる。これはいずれもこの名称によって価値論を経済的価値論と区別すること

を意図しているのである。ギリシア語の *δέξια* も *εὐχρη* も価値であり、従ってその動詞 *δέξιον* も *εὐχρίω* も評価するということであり、これは経済的な意味でもありうるが、しかし基本的には重んじ尊ぶということである。Axiomといえは数学や幾何学の公理のことであり、直接には価値の意味をもっていないようであるが、しかし好むと好まざるとに拘らず公理の公理としての意味を認めなければ数学も幾何学も成立しえないのであるから、そこにはアクシアにおける尊さという価値概念が含まれていると解してよいであろう。特にストア哲学においてアクシアは主観的相対的ではなく、物そのものの有する「よさ」としての価値を意味する。例えば蜜の甘さにはそれ固有のアクシアがある。これは絶対的善ではないにしても、外から比較的に付与されたものではなく、それ固有の「よさ」として内在的価値である (Cicero, *De Finibus*, III 34)。ハイデガーは現代の価値概念は主観性の立場における欲望目標にすぎず、従って「何人も単なる価値のためには死なない」と酷評しているが、しかしこれはおよそ価値なるものを否定することではなく、彼はアクシアという価値概念はこれを尊重している (M. Heidegger, *Holzwege*, 94. *Der Satz vom Grund*, 34)。尊さということは名誉をも意味するテイマーにおいて一層はつきりしている。いわゆる枢軸時代の始めに登場したヘシオドスはそれぞれの神々のテイマーがいかに定められているかを示した (*Theogonia*, 74)。これは最高神ゼウスを頂点とする神々の世界の秩序づけであり、これによってそれぞれの神々に固有の尊さが定まるのである。かかるテイマーの観念はアリストテレスにも継承されて深められている。彼はよきものを「可能的なもの」と「賞讃すべきもの」(エパインエトン)と「尊ぶべきもの」(ティミオン)に区別している。可能的なものは富や力のようによくもあしくも使うものである、従ってそのよさは内的ではなく外的である。賞讃すべきものは何らかの性質と関係し、この関係の仕方限定されたよきものであって、人間における優秀性(アレテー)とはこの種のよきものである。尊ぶべきものはそのような限定を越えている。だから「神々がわれわれ人間と関係づけられて賞讃されることは滑稽なこと

思われる」(*Ethica Nicomachea*, 1101 b 19)。神々は賞讃すべきものではなく「関係づけ」を越えた尊ぶべきものである。賞讃すべきものはまだ相対的なよさであるが、尊ぶべきものは絶対的である。アリストテレスにとって「最も神学的であり最も尊ぶべきもの」を研究することがまた最も尊ぶべき学問であるが、これは「第一哲学」としての形而上学である(*Metaphysica*, 1026 a 20-24, 1074 b 21-30)。——ただし、その最も尊ぶべきものをそのものとして完全に観想(テオレーン)しようと言うのであれば、それはわれわれにとつては疑わしい。既にヘラクレイトスは次のように述べている。「神にとつてはすべてが美であり善であり義であるが、しかし人間は或るものを不義と考え、他の或るものを義と考えた」(B 102)。われわれにとつては価値自体は理念にとどまるであろう。

価値論の名称として *Axiologie* あるいは *Timologie* が採用された理由はほぼ明らかになったと思う。ギリシア語の *アクシア* と *ティメー* は価値なるものの本来の意味を少くとも形式的に示しているのである。しかし近代思想においてはその意味は晦_くまされる。ロックに端を発しアダム・スミスを経てマルクスによって批判的に受けとめられる労働価値説において価値は社会的に使用価値から交換価値すなわち市場における価格へと変動するが、これによって価値本来の意味は見失われる。ロック自身には物に本性的に内在する価値 *worth* (*valor naturalis*, *Würde*) と物に外的に従って相対的に付着する価値 *value* (*pretium*, *Wert*) との区別があったとしても、歴史的にはこの区別はむしろ晦_くまされていった(H. Arendt, *The Human Condition*, 1959, 144-45, 338-49)。前世紀後半以来のドイツにおける価値哲学の主流のうちには、それに対して価値本来の意味を復権させるという課題が含まれている。この課題にたずさわる場合に無視することのできぬ二人の思想家がいる。それはニーチェとマックス・ウェーバーである。

ニーチェとウェーバー

現代の価値哲学にとつてニーチェとウェーバーを避けて通ることはできない。ニーチェは、

これまで人間生活を指導してきた最高価値が無価値となったことにニヒリズムの本質を求め、それを「神の死」としてあからさまにし、みずからは非道德主義の立場をとった。ウエーバーは、価値観はあたかも「神々の争い」のごとくに対立し、従って価値判断を客観的に基礎づけることは不可能であり、科学的には「没価値性」の立場をとるほかはないとし、これによって価値論争を惹起した。ニーチェとウエーバーの価値哲学はわれわれを価値相対主義に陥れる危険を秘めている。しかしそれが彼らの真意であるとは思われない。彼らは「真実」の探究をもってモットーとした。「神の死」と「神々の争い」は必ずしも揆を一にしないが、しかしニーチェとウエーバーが一致して「知的廉直」(intellektuelle Redlichkeit)を強調したことは注目すべきことである。

ニーチェにとって人間とは「もともと評価する動物」である(『道德の系譜』Bd. 76, 301)⁽¹⁾。この評価は売手と買手あるいは債権者と債務者というような人間関係に基づいた思考であり、これによって値段や見積りや等価などの価値概念が生ずる。だから価値とはかかる評価の体系であり、その評価を普遍妥当化するとき、そこに善悪の観念すなわち道德が成立する。かくして道德とは未確定の状態にある人間に評価の枠をはめて人間を確定化するものであるが、これによって人間の創造性は窒息せしめられてしまう。これは人間的生の自己疎外である。ニーチェの道德批判はこの疎外の克服をめざしている。

(1) ニーチェからの引用はクレエーナー・ボケット版に依る。ニーチェのニヒリズムの倫理学的意義については拙論「実存倫理の可能性」(理想社版、実存主義講座V『モラル』所収)。

「私の主要命題。道德的現象は存在せず、ただこの現象の道德的解釈のみが存在する。この解釈そのものの根源は道德以外のものである」(Bd. 76, 83, Bd. 78, 185)。

この命題によって従来の道德的観念の客観性は剥奪され、道德は道德以外のものすなわち生の主観的表現として解

釈される。ニーチエの痛烈極まる道徳批判は様々な道徳の本質の非道徳性を暴くことになる。例えば弱者の道徳は高貴なるものに對するルサンチマンに基づいた、強者に対する對抗策である。

では、ニーチエは従来の一の道徳を否定し去ったのであろうか。「しかし道徳を育成した諸力のうちには誠実性(Wahrhaftigkeit)があった。このものがついに道徳に反抗し、その目的論を、その利己的な考察を、暴くことになる——」(『權力意志』Bd. 78, 11.)。これによれば、ニーチエにとつても道徳的觀念がすべて経済的価値概念であるということにはならない。「誠実性」は人間のあるべき態度であり、これに基づく道徳批判は道徳の自己批判であり「自己克服」であるという意義を有することになるのである(Bd. 76, 44)。だから「道徳性の批判は道徳性の高い段階である」ということになるのである(Bd. 82, 266)。このより高い道徳はどのような性格のものであろうか。それはニーチエにとって「習俗の倫理」(Sittlichkeit der Sitten)の克服を目ざした道徳性である。

「もしわれわれが巨大な過程の終点に立つならば、すなわち樹木がついにその実を結び、社会性とその習俗の倫理が実はその手段にすぎなかった目的をついに明るみに出す地点に立つならば、そのときわれわれはその樹木の熟し切った果実として主権的な個体を見出すであろう。これは自己自身にのみ等しい個体であり、習俗の倫理から再び解放された個体であり、自律的にして超倫理的な個体であり(ただし「自律的」と「倫理的」とは相互に排除するからである)、要するに自己固有の独立的な長い意志をもち約束することのできる人間である。——そして彼のうちには、ついに達成されて自身がその化身となったものについての全筋肉を震わせるほどの誇らしい意識が、真の力と自由の意識が、人間そのものの完成感情が見出される。……この「自由」な人間、長い碎けない意志の所有者はこの所有のうちに価値尺度をもっている。彼は自己に基づいて他者を眺めながら、尊敬したり軽蔑したりする。……責任という格別の特権に関する誇らしい知識、この稀有の自由の意識は……支配的な本

能とまでなっている。彼はこれを何と呼ぶであらうか。……この主権的な人間がそれを自己の良心と呼ぶことに
は何の疑いもなく」(Bd. 76, 287-88)。

ここにはニーチエの道德批判の眞の精神が示されている。習俗の倫理を超克した「自律的」な道德性の確立という、この精神は、彼が激しく批判したキリスト教道德の実は徹底であるという逆説に支えられている。キリスト教は習俗の倫理の地上的な相対性を批判して信仰への道を取った。そこには相対性を越えようとする一種の知的廉直が認められる。この態度に倣うとき、そこに信仰そのものをも否定しようとする「認識の最後の理想主義者」である無神論者、反キリスト者、非道德主義者、ニヒリストたちが登場する。ニーチエ自身もまた、これらもはや何ものにも拘束されまいとする理想主義者たちの申し子である。しかし彼は彼らを批判して言う、「彼らはまだまだ自由精神ではない。けだし彼らはいまだに眞理を信じているからだ」と(Ind. 388)。彼らはキリスト教からは解放されたけれども、しかしいまだに「形而上学的価値、眞理の価値自体」の存在を信じている。これはニーチエからみれば「解釈」の断念である。そこで彼は一步を進めて断言する、「何ものも眞ならず、一切は許されている」と(Ind.)。

この謎のごとき命題はニーチエ解釈の鍵である。それはもう何をしても構わない、一切は許されているのだと解すれば解することもできる。しかしかかる反道德的態度はニーチエの眞精神に反する。利己的でありたいとは生物としての人間に内在する一つの性格である。ニーチエの道德批判には、道德の諸相を生物学的生の表現と解釈する自然主義がまつわりついている。それは方法論的視点としては有効であるが、しかし一切の道德をその種の自然に還元することは自由なる人間的生の、ニーチエの厭った、まさしく固定化である。かかる態度は自由精神に即すべきはずの「解釈」に反する。人間的生は生物学的生より以上である。それゆえ「何ものも眞ならず、一切は許されている」ということは、もはや眞なるものは存在しないということではなく、眞なるものを固定化せずに常に新たにより深くよ

り広く真理を求めるといふ自由精神の立場であるということになる。それこそ「自律」の道徳の成立基盤である。

そのような真理探究の精神に支えられている点ではウェーバーの価値論⁽²⁾も同様である。ウェーバーは価値解釈と価値討論を学的に重視したけれども、学問の名において断定的な価値判断を下すことを禁止した。しかしこれは彼が価値相対主義者であったからではない。彼は自身を相対主義者とみなしていない。むしろ逆である。「相対主義的に訓練された現代の歴史家は、彼が語る時代を一面においては時代そのものから了解しようとし、他面においてはそれを評価しようとするが、彼は自分の評価の基準を〈素材〉そのものに仰ぐようとする要求を懐いている……」。この要求は倫理的には何を意味しているか。それは「一面においては価値判断を下すことを中止しえず、だが他面においてはこの判断に対する責任を回避しようとする姑息な態度」である(M. Weber, *Wissenschaftsetheik*, 1951², 199-200)。ここからウェーバーにおいて「事実の真理を認識せよ」と「自己の理想に忠実であれ」という質を異にする二つの義務が生ずる。前者は没価値的な科学的認識に関する理論的義務であり、後者は価値判断に基づいた理想追求に関する実践的義務である。

(2) ウェーバーの価値論について詳しくは拙著『マックス・ウェーバーにおける科学と倫理』(清水弘文堂)の第一章。

われわれは歴史の全体を無前提に把握することはできない。歴史認識は種々の立場と視点のもとでなされるほかはない。複雑極まる人間的現実を分析するためには、例えばフロイトの精神分析学やニーチェのルサンチマン論やマルクスの経済的唯物論などが考慮されなくてはならない(ibid. 94)。しかしそれはあくまでも方法的論的手段としてであって、それらの理論でもって人間的現実を割り切ることではない。もしもそうするならば、それは認識と価値判断の質差の無視であり、その結果は自然主義あるいは経済一元論に陥ることになる。それらの理論の妥当性は経験的に検証されなくてはならないのである。これがウェーバーの没価値性の精神である。没価値性は決して実践的な無関心性